

the fall

ザ フォール

知っておきたいキリスト教のことば (128)

墮罪 ださい

「墮罪」という言葉は漢字からもわかるように、「罪に墮ちる」という意味です。一般的には罪を犯して罪人となってしまうことを言いますが、キリスト教では特に創世記3章に書かれたアダムとエバの行為を指します。

昔、郷ひろみと樹木希林が「林檎殺人事件」というデュエット曲を歌っていました。その歌詞の中に、「アダムとイブがリンゴを食べてから～」というフレーズがあります。(今の聖書では「イブ」は「エバ」と訳されています。また「善悪の知識の木」が「リンゴ」であるとは、聖書には書かれていません。)

子ども心に、「そうか、このアダムとエバの出来事があってから、殺人などの怖い事件が起こるようになったのか」と考えたかは覚えておりませんが、今でもこの歌詞はなぜか心に残っています。

「人はなぜ、罪を犯し続けるのか」、それはわたしたち人間の、永遠のテーマなのかもしれません。命を大切にしなければならないのはわかっているのに、戦争は起こり続けます。悲しみの涙など流したくないのに、争いやいさかいは絶えません。

聖書は、神さまはご自分にかたどって、人間を造られたと記します。しかし同時に、最初の間であるアダムとエバが犯した罪(神さまの言いつけに背いて木の実を食べたということ)が、すべての人類の罪として残り、神さまとの間に大きな溝ができたと説明しています。(この罪を「原罪」と呼びます。)

最初の間が罪に墮ちたことによって、すべての人間と神さまとの関係は壊され、わたしたち人間が神さまの前に正しい者となることはできなくなりました。つまりわたしたち人間は、罪の中にいるのだということなのです。

次回は「助け主」です。お楽しみに。



「楽園からの追放」

シャルル＝ジョゼフ・ナトワール

(1700～1777年)

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

(創世記3章6節)

